5707

第10次中期3ヶ年計画

東邦新生プランⅥ

2015年5月12日

東邦亞鉛株式会社
TOHO ZINC CO., LTD.

本資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、当社が現在入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいており、その達成を当社として約束する趣旨のものではありません。また、実際の業績等は様々な要因により大きく異なる可能性があります。

内容

Ⅰ. 東邦新生プランこれまでの歩み
1.新生プランと中期3ヵ年計画 P3
2.市況の推移 P4
3.収支の推移 P5
4.設備投資･原価償却費の推移 P6

Ⅱ. 第9次中期3ヵ年計画(2012～2014)の振り返り
1.市況の推移 P7
2.収支の推移 P8
3.設備投資･有利子負債残高の推移 P10

Ⅲ. 第10次中期3ヵ年計画(2015～2017)の概要
1.骨子 P11
2.具体的数値目標 P12
3.市況メインシナリオを前提とした収支計画 P13
4.セグメント利益の計画 P14
5.資源セグメントの計画 P15

Ⅰ. 東邦新生プランのこれまでの歩み

1. 東邦新生プランと中期3ヵ年計画

2000年から第5次中期3ヵ年計画がスタートしましたが、同時期の3ヵ年計画の施策を東邦新生プランⅠと位置付け、第9次中期3ヵ年計画で5回目の新生プランを迎えています。

東邦新生プランⅠ＝第5次中期3ヵ年計画(2000～2002年)「国際競争を勝ち抜くために」

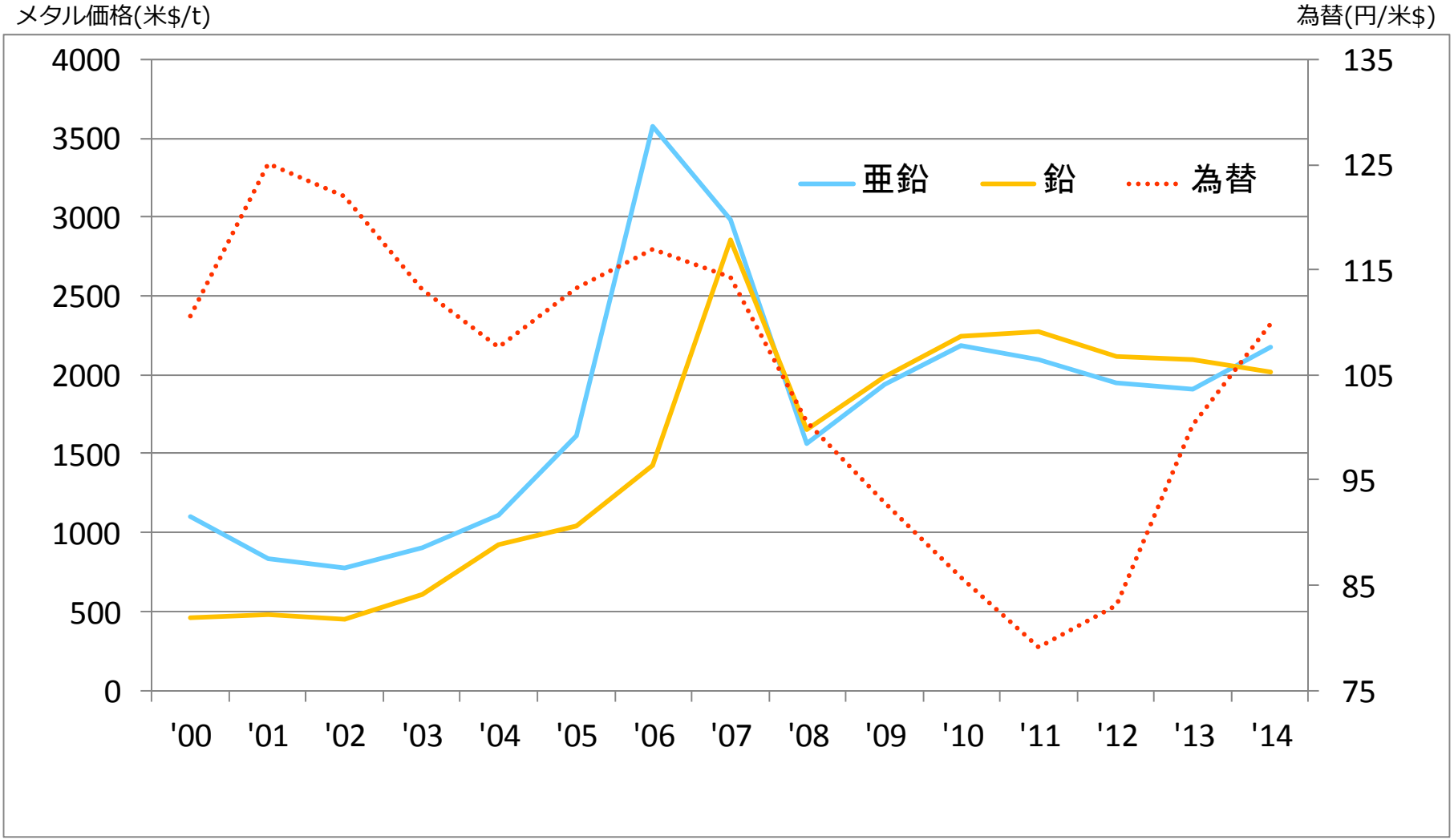
東邦新生プランⅡ＝第6次中期3ヵ年計画(2003～2005年)「自己責任の貫徹を」

東邦新生プランⅢ＝第7次中期3ヵ年計画(2006～2008年)「さらなる飛躍を求めて」

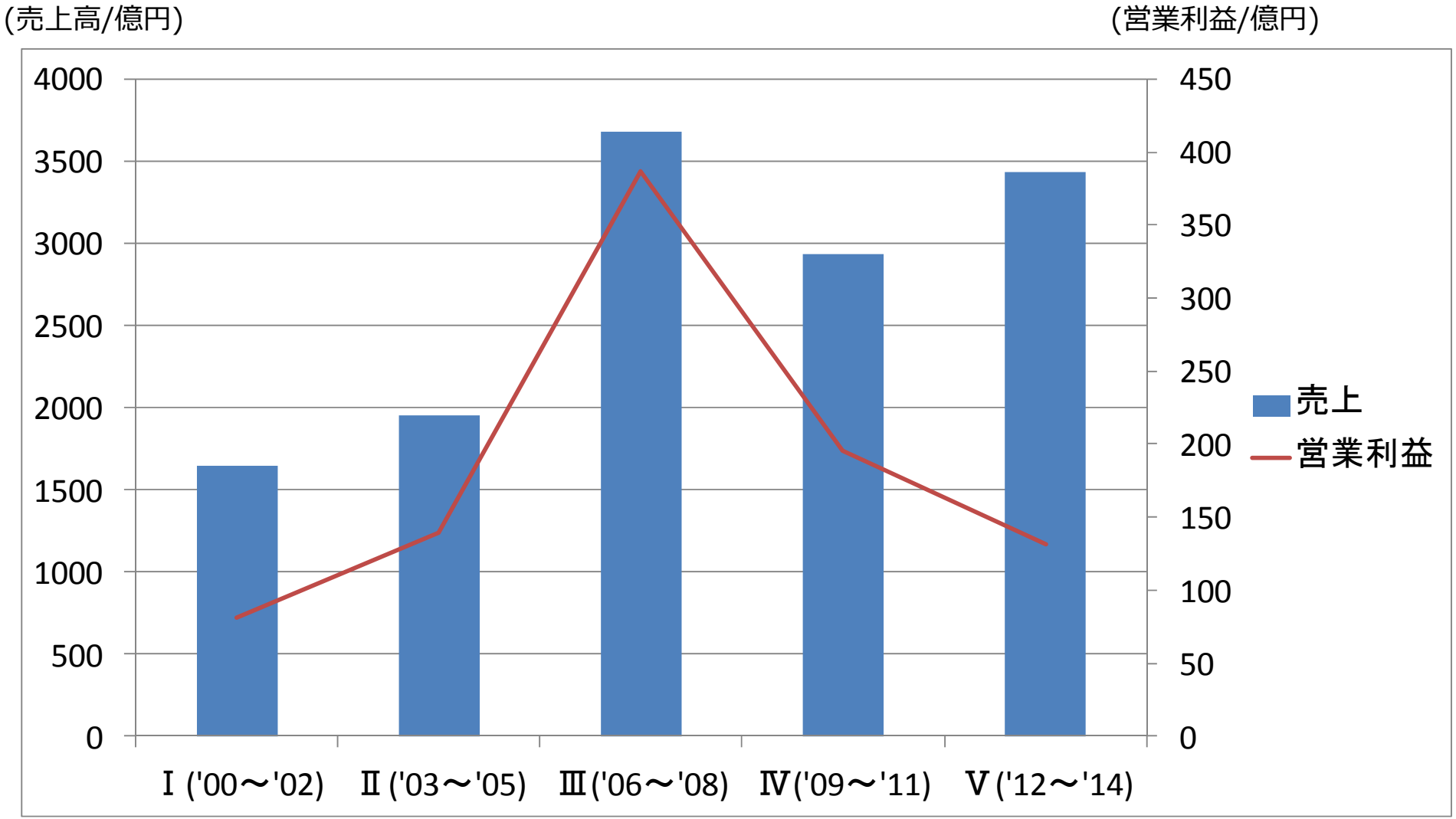
東邦新生プランⅣ＝第8次中期3ヵ年計画(2009～2011年)「原点回帰と次世代への基盤作り」

東邦新生プランⅤ＝第9次中期3ヵ年計画(2012～2014年)「新たな次元へ向けさらなる飛躍を」

2. 市況の推移


メタル価格(米$/t)
為替(円/米$)
4000
3500
3000
2500
2000
1500
1000
500
0
135
125
115
105
95
85
75
亜鉛
鉛
為替
'00
'01
'02
'03
'04
'05
'06
'07
'08
'09
'10
'11
'12
'13
'14

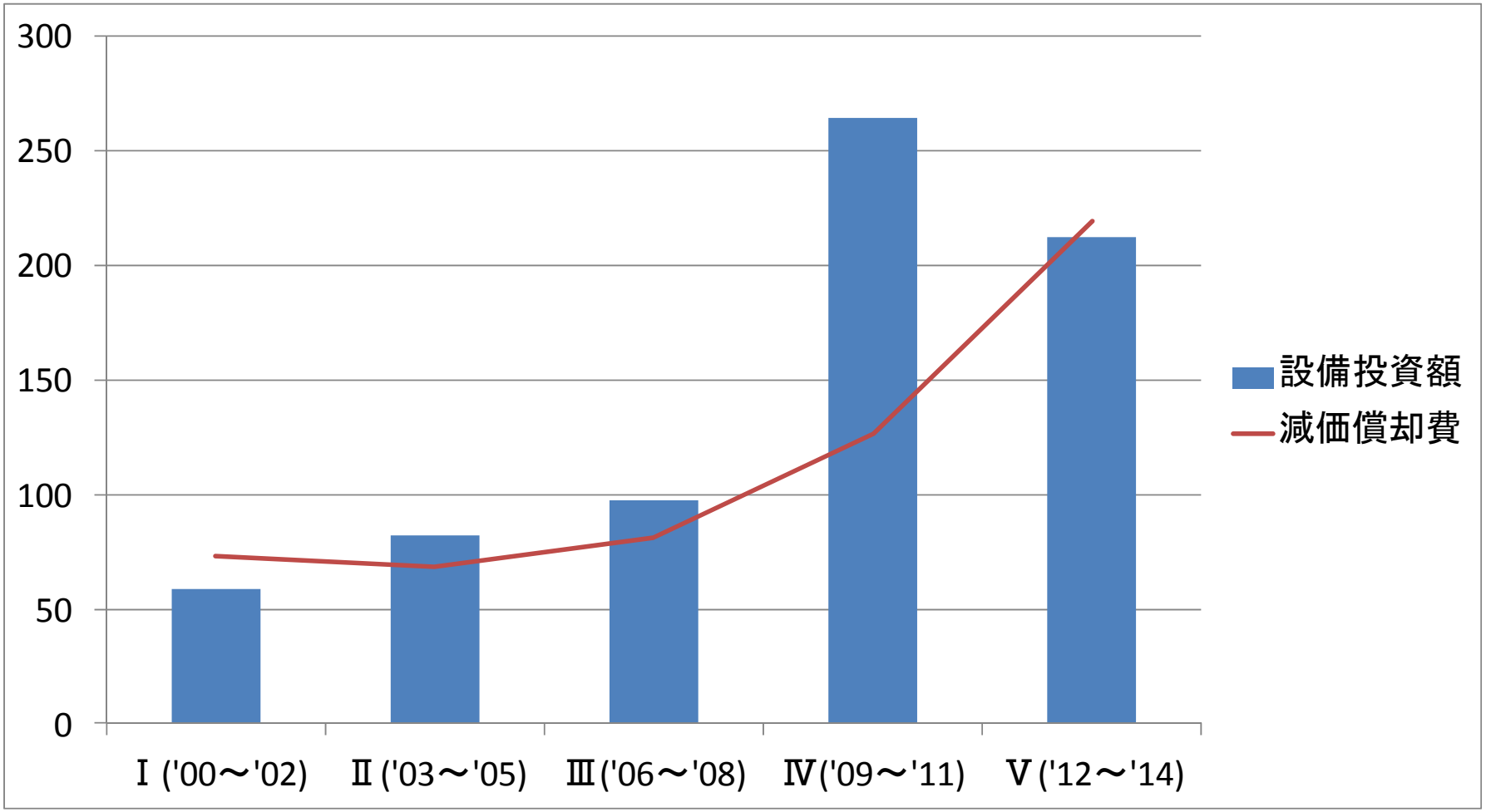
3. 収支の推移(連結)



*グラフは各中期3ヵ年計画期内の3ヵ年合計額

4. 設備投資･減価償却費の推移

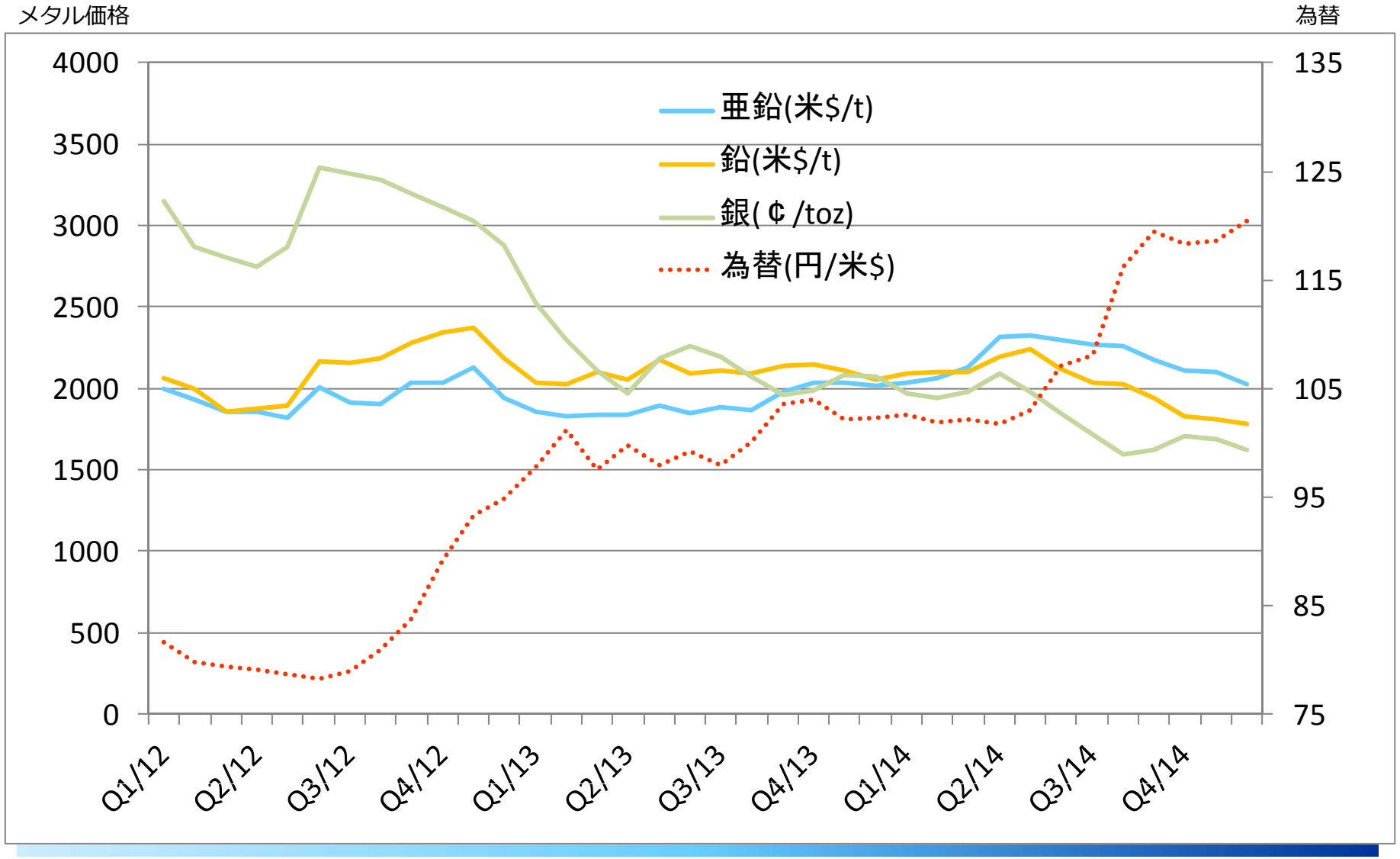
(億円)



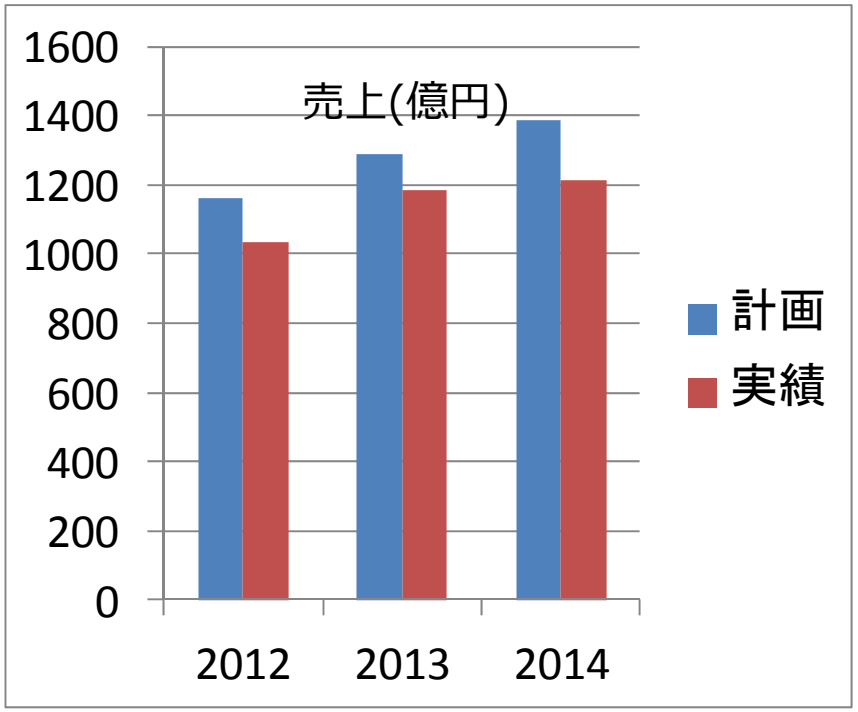
*グラフは各中期3ヵ年計画期内の3ヵ年合計額

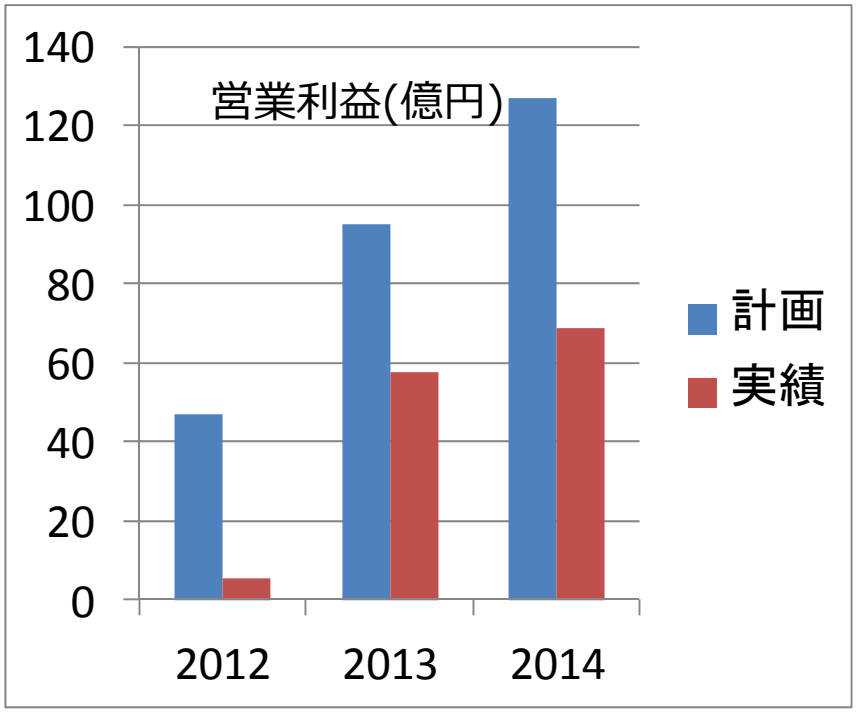
Ⅱ. 第9次中期3ヵ年計画(2012～2014)の振り返り

1. 市況の推移



2. 収支の推移(連結)



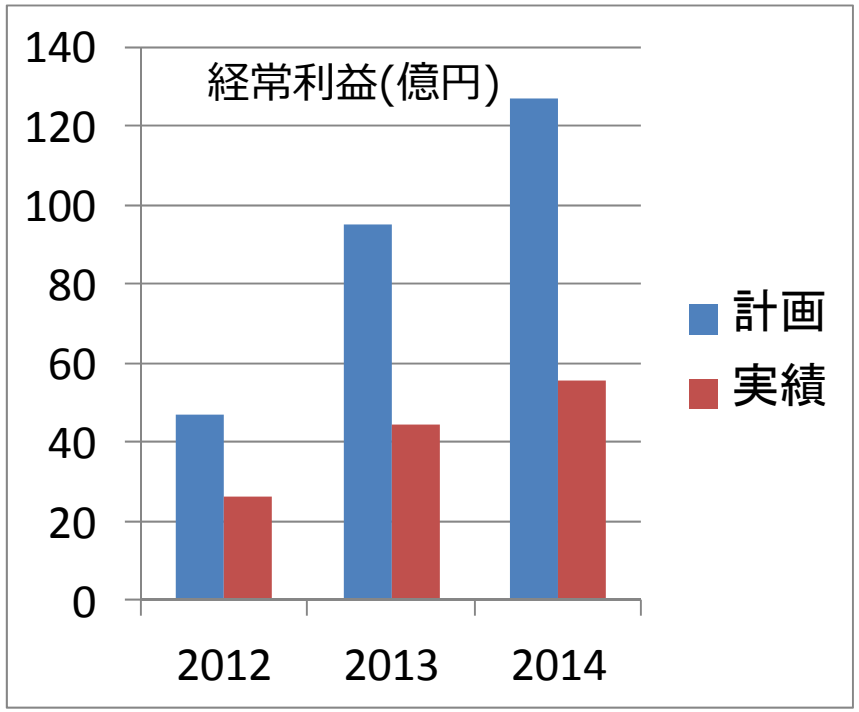


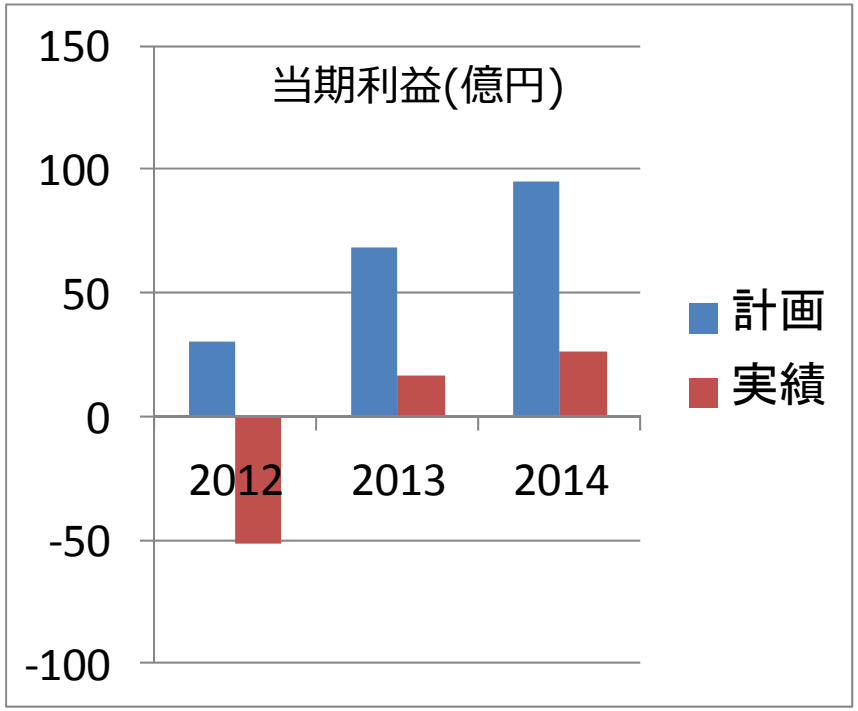
・その他セグメント(ソフトカーム事業部)の「不適切な会計処理」が2014年度に発生し、内部統制の強化が大きな課題として浮き彫りになりました。

・中計期間中は増収増益基調で推移しました。営業利益については、資源セグメントが計画比大幅未達となり、当初計画(累積ベース)に至りませんでした。

	(中計)	(実績)	(差異)
製錬	63	110	47
資源	120	△67	△186
電子部材	31	28	△3
環境･リサイクル	22	33	11
その他	41	29	△12
調整	△8	△2	5
営業利益	269	132	△137

2. 収支の推移(連結)





2014年度(中計最終年度)の経常利益当初目標は100億円超。

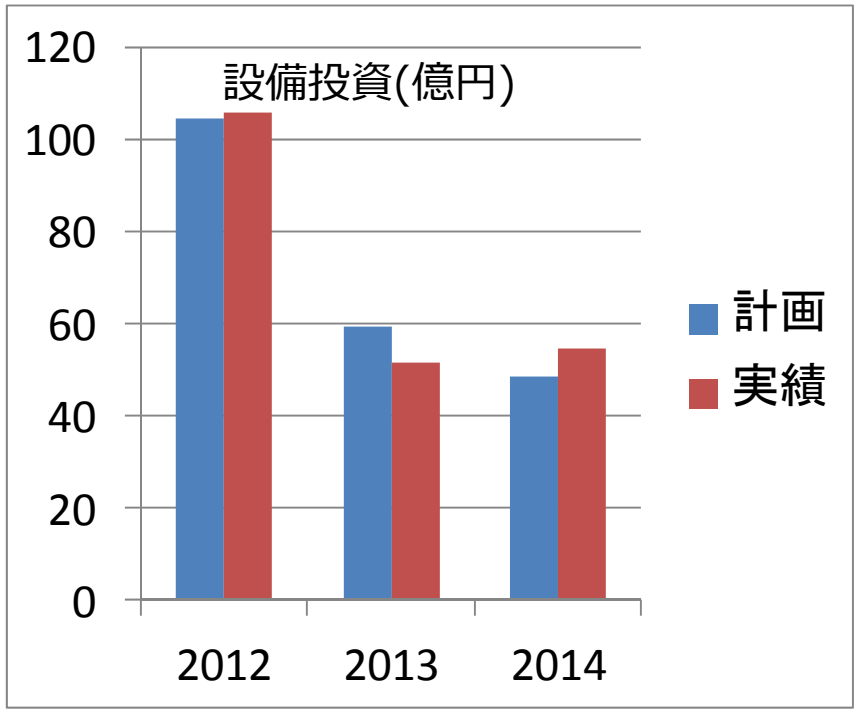
⇒実績は56億円で３ケタに及びませんでした。

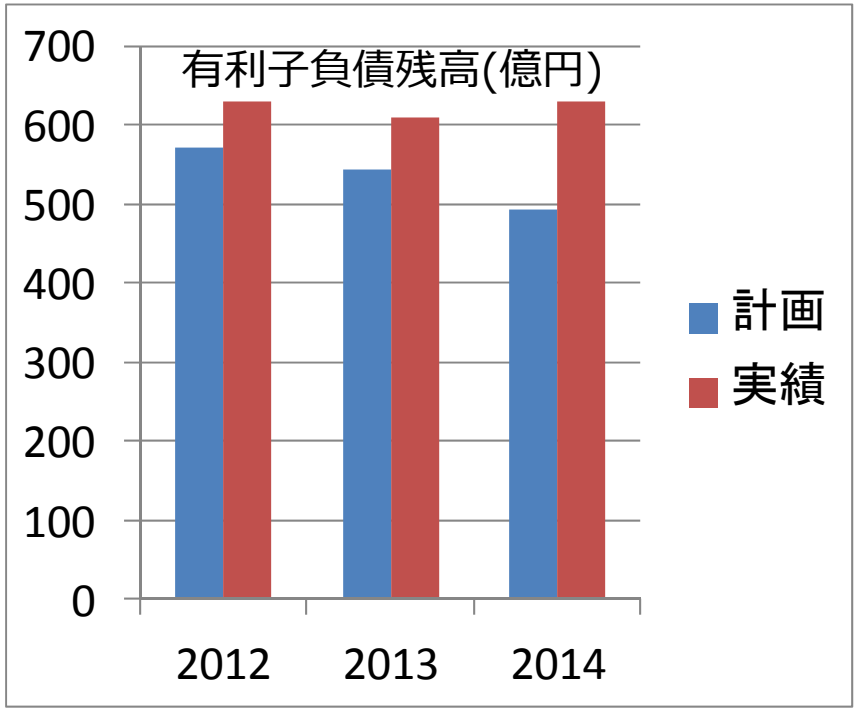
2014年度(中計最終年度)末の利益剰余金当初目標は400億円超。
⇒実績は252億円で150億弱未達となりました。

株主配当は10円を目標としたものの、2012年度5円、2013年度5円、2014年度7円で未達となりました。

自己資本比率は50%以上を目標としたものの40%前半にとどまりました。

3.設備投資･有利子負債残高の推移





D/Eレシオ　当初目標0.7に対し実績1.0

以上の経営成績を振り返りますと、最大の見込み相違は、資源セグメントの成績不振にあったといえます。資源セグメント利益の当初目標との3ヵ年差異累計は剰余金の当初目標未達額を超過しています。第8次中期3ヵ年計画で豪州の鉱山会社CBH社を完全子会社化するに当たり、多額の投資を費やしましたが第9次中期3ヵ年計画期間においては、未だ果実を刈り取るに至らず、次の中期3ヵ年計画に課題を残すことになりました。一方で、製錬セグメントや環境･リサイクルセグメントにおいては、市況の追い風もありましたが、製販一体の努力により、当初目標を達成することができました。

Ⅲ. 第10次中期3ヵ年計画(2015～2017)の概要

1. 骨子

2014年度に発生したその他セグメント(ソフトカーム事業部)の「不適切な会計処理」事例を大いに反省し、内部統制の強化に努めて参ります。その上で、以下3点を骨子といたします。

(1)第8次中期3ヵ年計画で投下した投資資金の回収開始(資源セグメント)

(2)ステークホルダーの期待に全方位的に応える最適操業体制の構築･実施(製錬セグメント)

(3)製錬･資源セグメントにおける市況影響のバッファーとなる安定収益の貢献(製錬･資源以外のセグメント)

第10次中期3ヵ年計画(東邦新生プランⅥ)スローガン
「全員で架けよう未来への橋」

(その趣旨)
経営理念に掲げるマルチステークホルダー(株主様･お客様･従業員･地域等)への永続的貢献を確固たるものにする為、東邦亜鉛グループの所属員全員で未来(次世代)へバトンをつないでいこう、というメッセージです。

<コーポレートガバナンス･コードへの対応>
自己資本利益率の向上、適切な株主配分の実施、企業統治の３点につき、強化を進めて参ります。
加えて、スチュワードシップ･コードも意識して、従来以上に資本市場との対話を積極的に行って参ります。

2.具体的数値目標

			実績	目標		
			2014年	2015年	2016年	2017年
カソード亜鉛生産量 (千t)			105.3	99.0	99.0	99.0
鉛電解製品生産量 (千t)			88.4	90.0	90.0	90.0
銀製品生産量 (t)			395	400	400	400
CBH精鉱生産量 (千dmt)	Zn	エンデバー	82.2	84.9	55.4	57.8
		ラスプ	37.9	44.7	50.5	53.1
		計	120.2	129.7	105.9	111.0
	Pb	エンデバー	48.8	40.5	31.0	30.0
		ラスプ	18.2	24.6	28.9	26.7
		計	67.0	65.1	59.8	56.7

上記生産量を前提とした設備投資計画

	実績	目標		
	2014年	2015年	2016年	2017年
国内(億円)	24	31	28	30
CBH(百万豪$)	35	41	29	23

3.市況メインシナリオを前提とした収支計画

(1)市況メインシナリオ

	実績	メインシナリオ		
	2014年	2015年	2016年	2017年
亜鉛(米$/t)	2,175	2,300	2,500	2,700
鉛(米$/t)	2,021	2,000	2,200	2,400
銀(米$/toz)	18.1	17.0	17.0	17.0
円/米$	109.9	115	115	115
米$/豪$	0.906	0.750	0.750	0.750

(2)上記市況を前提とした収支計画(連結)

	実績	メインシナリオ		
	2014年	2015年	2016年	2017年
売上(億円)	1,211	1,240	1,260	1,360
営業利益(億円)	69	96	115	150
経常利益(億円)	56	80	105	140
当期利益(億円)	27	50	70	100
キャッシュフロー(億円) (当期利益+減価償却費)	111	135	150	180

*なお株主様への還元については、従来通り短期業績に関わらず、安定配当を目指します。(2015年度@7円)

4.セグメント利益の計画

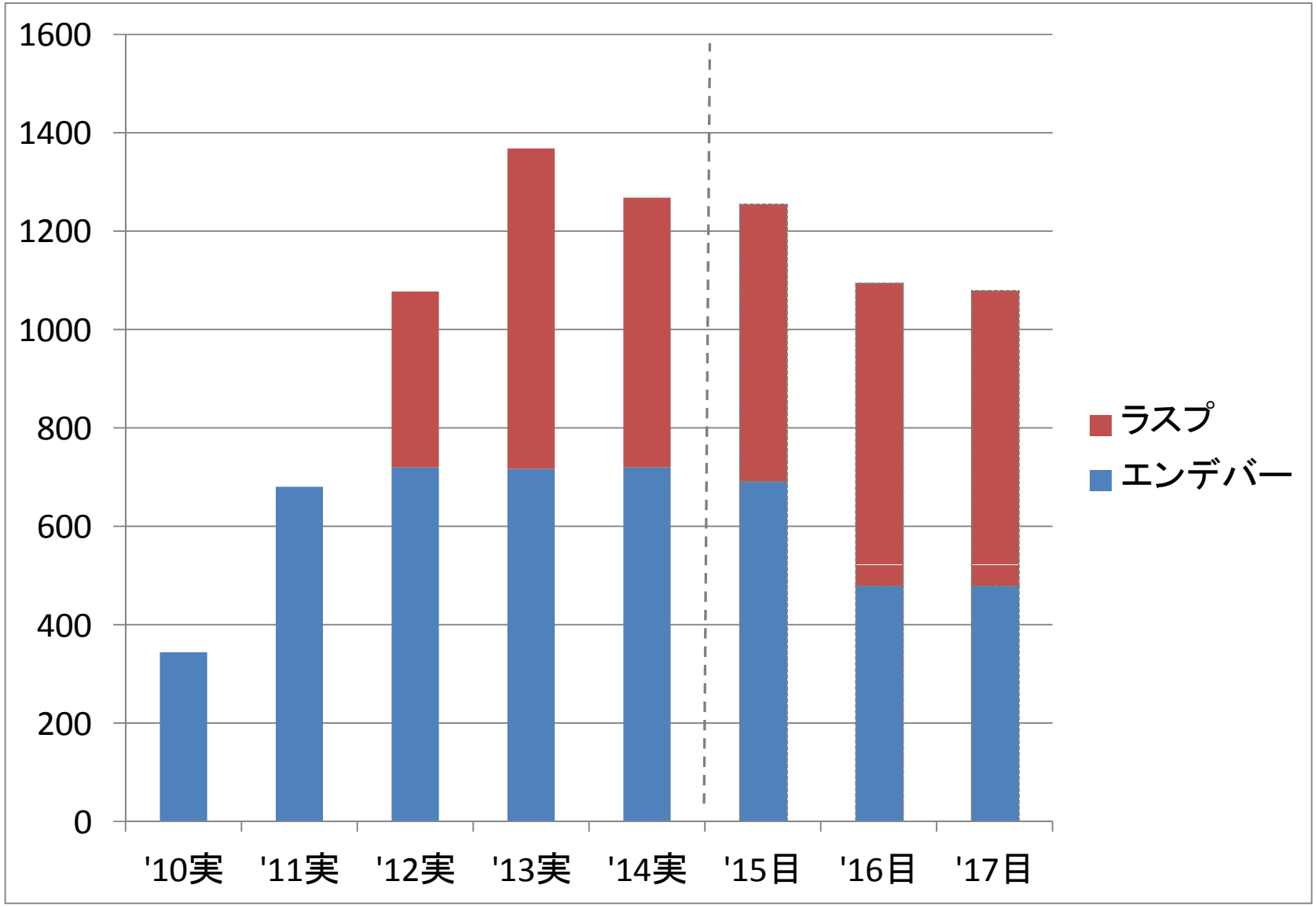
	実績	計画			ミッション
	2014年	2015年	2016年	2017年	
製錬(億円)	51	55	69	78	ステークホルダーの期待に全方位的に応える最適操業体制の構築･実施
資源(億円)	△16	12	14	35	CBH社ラスプ鉱山の高品位鉱アクセスによる採算改善、効率操業、コスト削減
電子部材(億円)	11	9	10	11	電子部品･電解鉄･プレーティング･機器部品による安定収益への貢献
環境･リサイクル(億円)	17	13	15	18	既存業務の拡大と新規業務展開の両面作戦
その他(億円)	7	8	9	10	防音建材･土木･建築･プラントエンジニアリング･運輸による安定収益への貢献
調整(億円)	△1	△1	△2	△2	
営業利益合計(億円)	69	96	115	150	

5.資源セグメントの計画

		2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年 (目標)	2016年 (目標)	2017年 (目標)
粗鉱処理量 (千t)	エンデバー	342	679	719	716	719	690	480	480
	ラスプ	-	-	359	651	543	564	613	600
	計	342	679	1,078	1,367	1,262	1,254	1,093	1,080
亜鉛精鉱生産量 (千t)	エンデバー	38.0	75.2	85.7	92.8	82.2	84.9	55.4	57.8
	ラスプ	-	-	25.3	49.7	37.9	44.7	50.5	53.1
	計	38.0	75.2	111.0	142.4	120.2	129.7	105.9	111.0
鉛精鉱生産量 (千t)	エンデバー	22.1	44.6	41.7	49.4	48.8	40.5	31.0	30.0
	ラスプ	-	-	13.7	26.5	18.2	24.6	28.9	26.7
	計	22.1	44.6	55.3	75.9	67.0	65.1	59.8	56.7

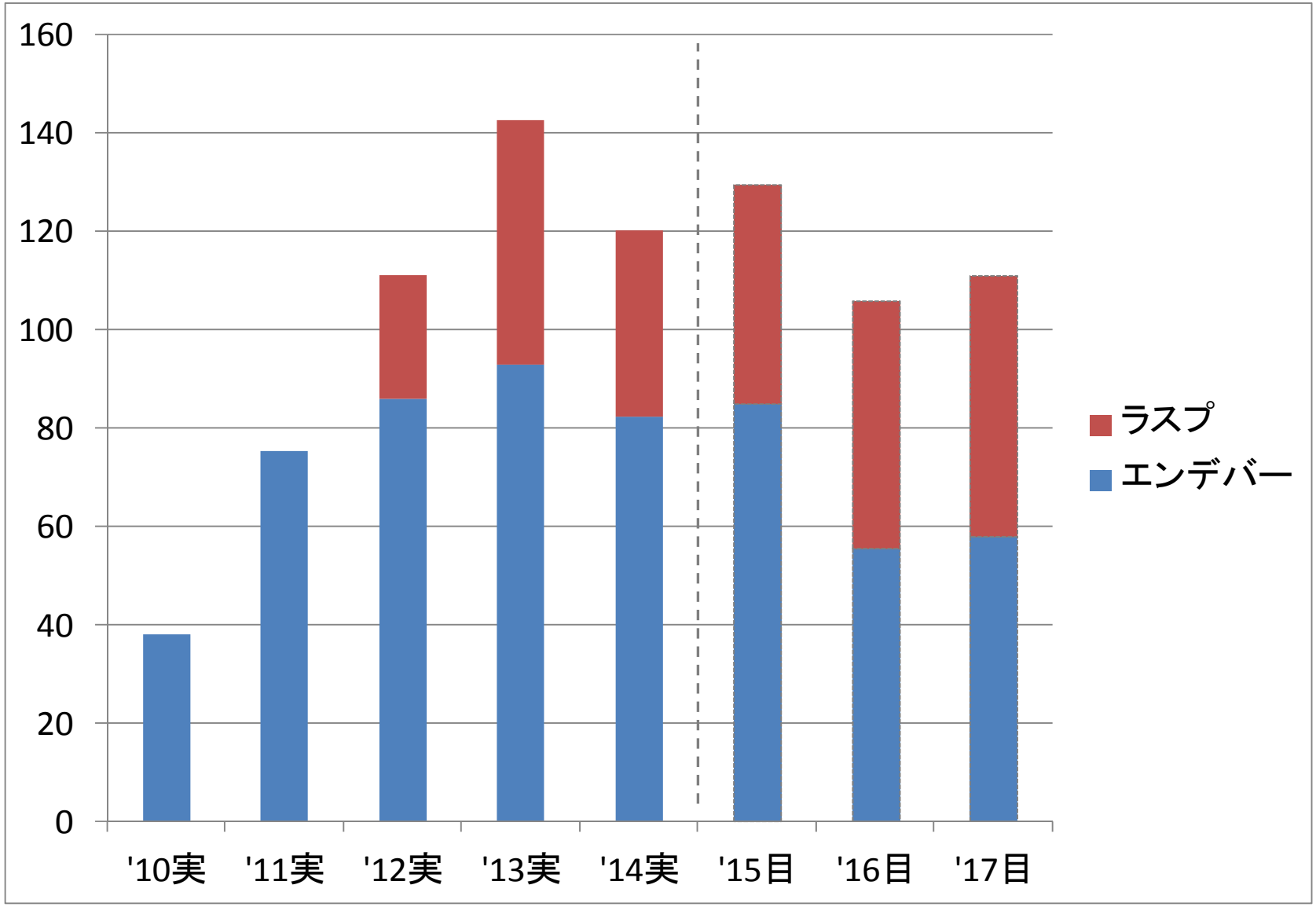
粗鉱処理量

(単位:千t)


1600
1400
1200
1000
800
600
400
200
0
'10実
'11実
'12実
'13実
'14実
'15目
'16目
'17目
ラスプ
エンデバー

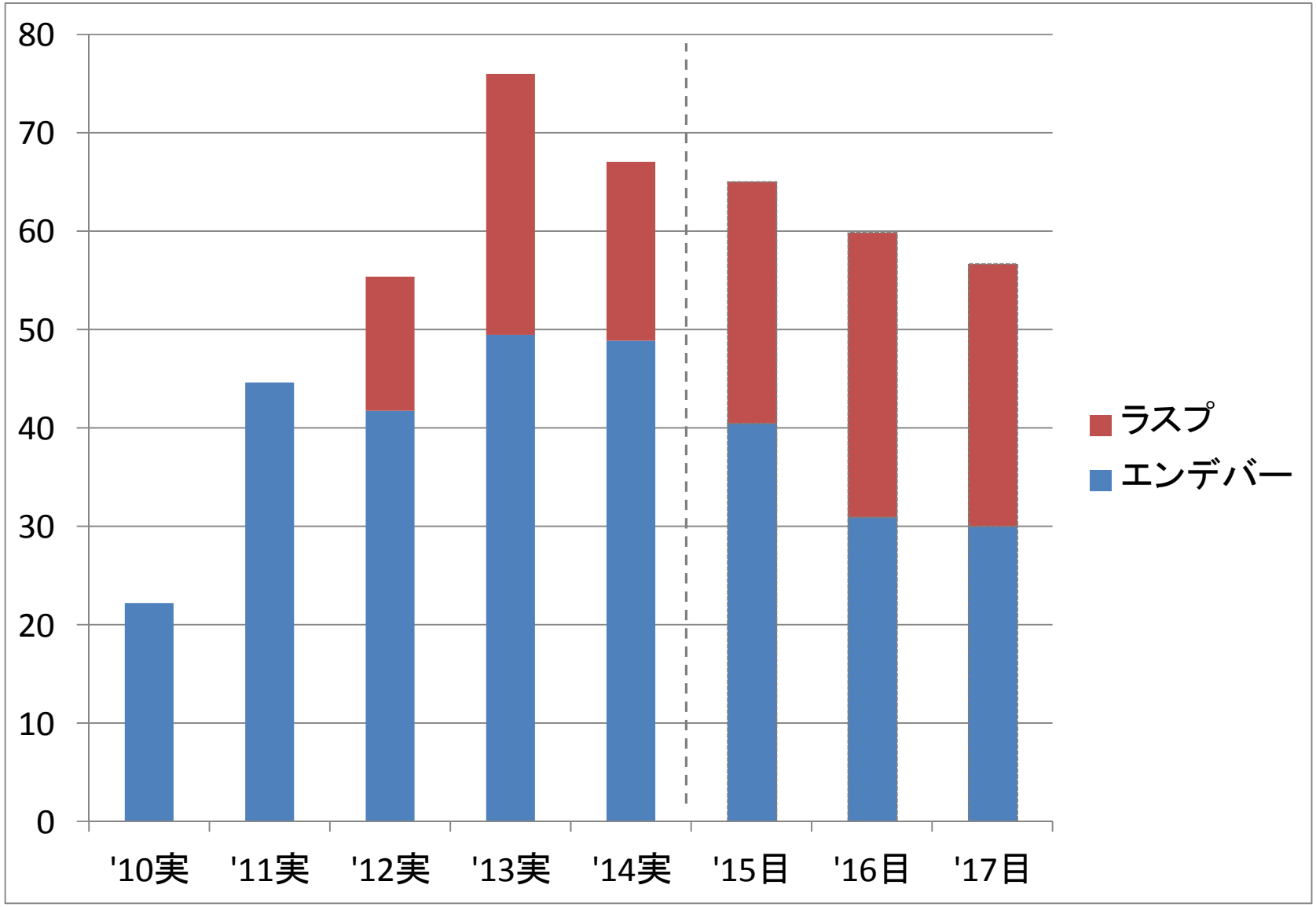
亜鉛精鉱生産量

(単位:千t)



鉛精鉱生産量

(単位:千t)



		2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年 (計画)	2016年 (計画)	2017年 (計画)
市況 (米$/t)	亜鉛	2,153	2,093	1,940	1,906	2,163	2,300	2,500	2,700
	鉛	2,240	2,402	2,085	2,142	2,085	2,000	2,200	2,400
	為替 (AUD/USD)	0.960	1.030	1.037	0.962	0.906	0.750	0.750	0.750
セグメント利益 (億円)		△3.0	△8.3	△33.8	△16.6	△16.4	12	14	35
減損 (億円)		△1.1	-	△48.5	-	-	-	-	-
【ご参考】 親子ローン 為替評価損益 (億円)		9.9	1.5	22.6	△20.2	△11.7	-	-	-

(1)2010年度(連結初年度)以降の振り返り

①精鉱生産量
・粗鉱処理量は、2014年度のラスプ減産(7割操業)により、2013年度をピークに頭打ちの状況です。
・結果として精鉱生産量も2014年度に大きく落ち込みました。

②損益
・2010年度以降の累積セグメント損失は▲78億円、減損は▲50億円の状況です。
・2010年度以降の親子ローン(東邦亜鉛⇒CBH)の為替評価損は累積で＋2億円ですが、
米＄安期の2012年度までは黒字、米＄高期の2013年度以降赤字と、
ボラティリティーの大きな状況が続きました。

(2)第10次中期3ヵ年計画の概要

①精鉱生産量
・エンデバー鉱山は、現時点で第11次中期3カ年計画中に閉山を迎える計画であり、生産量は減少の方向です。
・ラスプ鉱山は、2015年度以降、高品位鉱を含めフル操業に戻り、生産量は増加の方向です。
・しかしながら、エンデバー鉱山の減少が効いて、
CBH全体での精鉱生産量は2015年度⇒2016年度で減少の見込みです。

②施策＝精鉱生産量減少を前提に、一層の合理化・効率化をはかります

・ガバナンス
⇒ＣＢＨ社ＣＥＯを当社からの出向者に変更いたします。当社との意思疎通の改善を図るとともに、
業務の合理化を進めて参ります（コスト削減効果は本中計に織り込まず）。

・操業の効率化
⇒エンデバー鉱山は「Back in black」プロジェクトが功を奏し黒字化しましたが、
当社から出向の新ＣＥＯにより、ラスプ鉱山への横展開を一層進め、
効率的な生産体制の確立を目指します（コスト削減効果は本中計に織り込まず）。

・親子ローンの損益ボラティリティーの縮小化
⇒米＄建ローンについては、2015年度期初に元本を半減させました。
豪＄建てローンについては2015年度上期中に株式化をはかり、
営業外損益が過去のパフォーマンスに与えたボラティリティーを大きく減少させます。